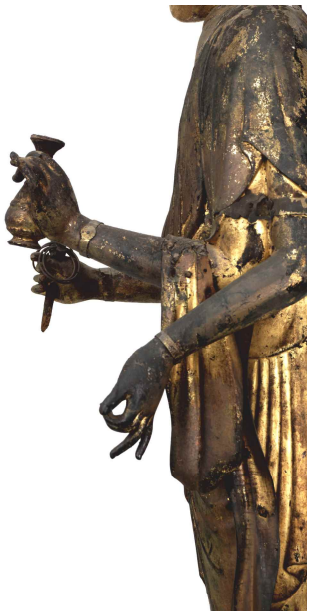
平成30年度第３回企画展示

神仏とともにある暮らし

Ⅰ　時をこえる祈りの日々　―観音と阿弥陀―
Ⅱ　祈りのかたち　―大絵馬と小絵馬―
Ⅲ　暮らしを見守る神々
Ⅳ　年中行事の行い　―正月から節分まで―

はじめに



私たちの暮らしの中にはさまざまな祈りがあります。先人たちは、季節や人生の節目で神や祖先に感謝と祈りを捧げてきました。人々は「祭」や「講」をいとなみ、心を一つにして豊かな実りや日々の平安を祈り、暮らしの活力を保ってきました。

また、僧侶や宮司、さらには山伏や先達といった民間信仰に寄り添う宗教者は、人びとと暮らしをともにしながら、豊かな日々を送る手助けをしてきたのです。

企画展示では、桶川市歴史民俗資料館が、地域のみなさんとともに活動する中で知ることのできた神仏とともにある伝統的な暮らしの姿を紹介します。

〔展示期間〕
平成31年2月10日（日）～平成31年3月17日（日）

桶川市歴史民俗資料館

Ⅰ　時をこえる祈りの日々　―観音と阿弥陀―

仏教がこの国の自然と人びとの暮らしに定着していく中で、観音菩薩と阿弥陀如来は人びとの願いを受けとめてきました。観音菩薩は、人びとが助けたまえとその名を称えれば、相手に応じて姿を変えてあらゆる場所に現れて救うとされ、慈悲の仏として女性の厚い信仰を集めてきました。

新御堂のおとき念仏

新御堂は、桶川市川田谷の薬師堂地区にあります。

ここでは、おばあさんたちが毎月一回集まり、「お斎（おとき）」と呼ばれる念仏講が行われていました。

家の仕事に追われてきた女性たちにとって、家事を離れた後に入る念仏講は楽しい交流の場でもありました。

観音　観音　多けれど　みより観音慈悲仏
世情の女人を助けるために　血の池地獄にお立ちある
それをば女人は知らずして　観音念ずるひまもなし
－血の池地獄（女の念仏）－

新御堂のおとき念仏と木造十一面観音菩薩立像　市指定文化財

資料解説　―新御堂の十一面観音菩薩立像―

制作時期は12世紀末頃。造立以来、頭部や右腕等を失う大きな損傷を受けながらも、その度に補修され、今日まで大切に受け継がれてきました。

頭部が明治初期のものに替わっているものの、本体は成熟した藤原様彫刻の特色を示す美作であり、桶川市指定文化財に指定されています。

資料解説　―旧西福寺十一面観音菩薩坐像―

川田谷前領家区の王子センターには、明治時代に廃寺となった旧西福寺の十一面観音菩薩坐像が安置されています。

像の胎内には、納札があり、江戸時代の正徳４年（1714年）に造立されたことや、観音に結縁した人びとの名が記されています。念仏講が一両一分を喜捨したと記されています。

旧西福寺の十一面観音菩薩坐像と納札

東光寺の百万遍講

百万遍念仏とは、念仏を百万回唱え、その功徳を得ようとする行いです。川田谷の薬師堂地区の東光寺では、その年に故人となった村人を供養するために、毎年12月８日に百万遍念仏が行われています。

女性たちは、鉦の音に合わせて大きな数珠を回しながら、「なんまいだんぼ、なんまいだんぼ」と念仏を唱えます。

百万遍念仏が終わると、供養した故人のお墓に参り、最後に、百万遍念仏を始めたという常禅和尚の供養塔に卒塔婆を手向けます。

東光寺の百万遍講

常禅和尚の供養塔

数え札と大数珠

阿弥陀一尊種字板石塔婆

資料解説　―阿弥陀一尊種字板石塔婆―

板石塔婆は、板状の石製供養塔で、鎌倉時代から江戸時代へと移り変わる17世紀の初めまでにたくさん造立されています。桶川市内においても鎌倉時代の文永８年（1271）を最古として400基以上発見されています。

板石塔婆の多くが、阿弥陀如来を表す種子を刻んでいます。このことは、中世において、極楽往生を願う阿弥陀信仰が民間に深く受け入れられていたことを示しています。

Ⅱ　祈りのかたち　ー大絵馬と小絵馬ー

室町時代になると大きく、さまざまな絵柄が描かれる大絵馬が盛んに奉納されるようになりました。一方、小絵馬も庶民に受け継がれ、病気平癒、家内安全、縁結びなどの願いを託す民間信仰として、神社や寺院に奉納されていきました。桶川市内では、川田谷の村堂から貴重な資料が発見されています。

前領家山王社の小絵馬

前領家山王社

桶川市川田谷の前領家地区の山王社は、朱塗りの鳥居に山王大権現の社号額がかかる小さな社です。山王信仰は、比叡山延暦寺の地主神である日吉大社に由来します。山王信仰では猿が神の使いとされ、民間信仰では子宝に恵まれ安産を祈願する神としてまつられています。前領家の山王社でも、猿の石像や祈願のために奉納された絵馬がたくさん納められていました。

もっとも古い奉納物は、安永７年（1778）の小絵馬です。

小絵馬は、随時の祈願の奉納物であるため、江戸時代中期にさかのぼる古い小絵馬が現存することはまれです。そのほかの絵馬もいずれも江戸時代のものです。

小絵馬　桃持猿

最古の小絵馬　安永７年

資料解説　ー小絵馬の画題と祈願ー

山王社に奉納された絵馬の絵柄については、「桃持猿」が子授けや女性の病の平癒を願う祈願に用いられるとおり、礼拝の絵馬はすべて女性を描くものでした。他の絵柄についても、「日の出に鷹」は子授けや安産祈願、「鶏の親子」は夜泣き止めと、女性にとって切実な産育に関わる祈願が行われていたことを示しています。

馬

恵比須大黒

女子礼拝

尉と姥

日の出に鷹

鶏の親子

桃持猿

天沼薬師堂の絵馬

川田谷天沼地区には、地区の人々が大切に守っている薬師堂があります。薬師如来は病気をいやし、現世で人びとを守る身近な仏として信仰を集めてきました。医術の発達していない当時は、神仏に祈ることによって病気を治していました。

この薬師堂には、向かい「め」の字の小絵馬が残されています。薬師は特に目の病に霊験があるとされ、この形の絵馬を奉納することが行われています。

拝みと薬師の化身

天沼薬師堂

向かい「め」の小絵馬

資料解説　ー天沼薬師堂奉納大絵馬ー

大絵馬は、奉納者が個人ばかりではなく村中や講などの仲間であることが多く、奉納の目的も祈願の成就や成功への感謝といったものです。絵柄も祈願にちなむものばかりではなく、武者絵などの画題が選ばれることもあります。

この絵馬は、安永２年（1773）に天沼村４名、下石戸村１名、前領家村１名、八幡原村17名によって奉納されました。八幡原村の筆頭に書かれている高柳専右衛門は、荒川の河岸の問屋を営んでいたとする記録が残されています。

絵の題材は、大絵馬によく見られる「武者絵」で、弁慶らしき人物が描かれています。

天沼薬師堂奉納大絵馬

Ⅲ　暮らしを見守る神々

関東平野を取り巻く山々には、古代から信仰されている霊山が数多くあります。江戸時代、霊山の修験者（山伏）は「御師」として宿坊を構え、里をまわってお札を配り、人びとを参詣へといざないました。

明治の近代国家建設の改革の中で神と仏をともにまつることは禁止され、山の「権現」は「神社」にかわり、修験の寺は廃寺となっていきました。それでも、人びとは展示した御札のとおり、たくさんの神仏との交流を続けながら、今日に至っています。

人生を祈る　富士と大山

富士（浅間神社）

富士山への信仰は、江戸時代に富士講として組織され、人びとは先達とともに登拝を行いました。桶川にも富士講の人びとが築いた富士塚が残されています。

明治に至り、富士講は廃され、扶桑教会となりました。加納の浅間神社は中山道桶川宿の富士講の伝統を伝え、近年まで人びとの信仰を集めていました。７月１日の山開きの日に赤ちゃんを抱いた人びとが参詣すると、先達の岩崎さん（故人）は、健康に育つことを祈って、子供の額に犬の字の朱印を押しました。

加納浅間神社　初山

富士講御札

御札　扶桑教会

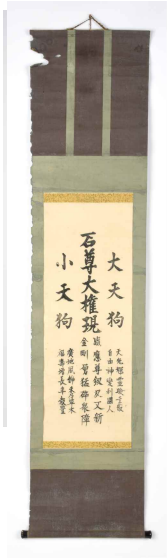
大山（阿夫利神社）

神奈川県伊勢原市の大山（おおやま）に祀られている大山阿夫利神社は、江戸時代には石尊大権現と呼ばれ、最盛期である宝暦年間（18世紀半ば）には、70万の講が組織されたとも伝えられています。

桶川市内においても、各地区に大山講が組織されています。

かつては、若者が15歳になると集団で夏山に参拝し、一人前になるともされていました。

阿夫利神社御札



大山講の掛け軸

大山燈籠（坂田地区）

資料解説　－納太刀（おさめだち）－

江戸時代の大山参りの風俗として、「納太刀」が見られました。大きな木太刀をかついで登山参拝し、帰山する時に他の人が奉納した木太刀を持ち帰って災い避けとしたといいます。

展示資料は、川田谷前領家地区の山王社に納められていたものです。宝暦12年（1762）正月に天沼氏によって奉納されたことが記されています。

江戸時代中期の納太刀の実例として、たいへん貴重な民俗資料です。

山王社に奉納された納太刀

農を祈る　御嶽と榛名

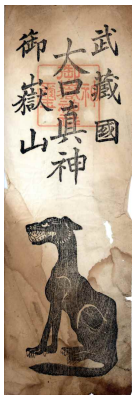
御嶽山

川田谷地区のお年寄りが、青梅市の御嶽山に向けて手を合わせ、御嶽は農家の作神だと教えてくれたことがあります。

御嶽山は、江戸時代に御嶽山蔵王権現として広く信仰を集め、桶川の村にも御嶽講が組織されていました。

御嶽山では、害獣を駆除するオオカミが祀られ、このことから農業を守る神として信仰を集めたともいわれています。

御嶽山の御札（江戸時代）



御嶽山の御札
（大口真神）

榛名山

榛名神社は、古くは榛名山巌殿寺と呼ばれ、神仏習合の山岳寺院でした。榛名神社の参道には、今でも、参道に沿って御師の屋敷を見ることができます。御師は御札を配り、村々に組織された榛名講からの参詣者を受け入れていました。

榛名山への信仰は、農業と結びつきが深く、雷雨と雹の被害を避ける利益があるとされていました。桶川は、麦や陸稲、甘藷などを栽培する畑作地帯でした。昭和50年代には畑の中に榛名神社のお札が立ててある光景をよく目にしました。

また、桶川地方では、雨乞いのために、榛名神社の水をいただきにいったという話が伝わっています

御師の祈祷札

御札（雷電除）

家の安全を祈る　三峯　秋葉　愛宕

三峯山　－盗賊除け－

三峯神社のおいぬ様

三峯山は、秩父地方にあって、盗賊除けの神として広く信仰されています。川田谷前領家の矢部家に伝わる御札の中に、江戸時代の三峯山大権現のお札を見ることができます。前領家区では、近年まで、秋葉講、榛名講とならぶ大講の一つとして三峯神社のお札を受けることが続けられていました。

三峯神社では、宝登山や御嶽山と同じく、ニホンオオカミである「おいぬ様」を神としています。このことから、盗賊から家を守る深い信仰が寄せられていました。

秋葉と愛宕　－火伏（ひぶせ）－

家の安全にとって火事の禍を避けることも大切なことでした。秋葉山と愛宕山は火伏に大きな利益をもつと信じられてきました。

秋葉山（静岡県）、愛宕山（京都府）とともに、関東からは遠い神ではありますが、修験者によってその信仰は全国に広まり、各地に愛宕神社や秋葉神社が勧請されています。

桶川市川田谷の滝の宮には愛宕神社があり、市域の秋葉山の御札はさいたま市指扇の秋葉神社から配られています。

愛宕権現の御札

御札（火防）

資料解説　－加納笹原の愛宕講資料－

愛宕信仰は、京都市の北西にある愛宕山を中心とした火の神を祀る信仰です。神仏習合の江戸時代には本地仏として騎馬の勝軍地蔵を祀っていました。

展示資料は、平成19年まで続いていた加納笹原地区の愛宕講の資料です。勝軍地蔵の騎馬像は、江戸時代中期にあたる寛延２年（1749）に講中の10人によって作られたと、厨子の背面に刻まれています。

笹原地区の愛宕講は、戸主である男性を構成員とします。厨子に納められていた愛宕講の記録から、昭和８年には、講員が米８合と菜代として20銭を持ち寄り、年６回の講が催されたと記されています。昭和62年以降は、正月２日に催されていました。長い伝統を伝えるこの愛宕講ですが、平成19年の開催をもって幕を閉じました。

加納笹原の愛宕講の厨子

資料解説　－矢部家民間信仰資料に見る江戸時代の御札－

神宮大麻

高山不動の祈祷札

桶川市川田谷の前領家地区の山王社には、地元の矢部家が伝えてきた江戸時代の民間信仰資料が伝えられており、桶川市指定有形民俗文化財として指定され、桶川市歴史民俗資料館が保管しています。

御札の中には、御師（おんし）が配った祓い串を剣型の紙で包んだ伊勢神宮の御札があります。明治４年に御師が廃止される以前の形を示す貴重な資料です。

また、高山御師から配られた高山不動の御札のように、修験（山伏）から出された御札が多く見られます。これも明治に至り、近代国家の神社制度の改革の中で神仏混淆（こんこう）が禁止される以前の修験の活動を知る貴重な資料です。

Ⅳ　年中行事の行い　―正月から節分まで―

家や村の信仰行事は、毎年、春夏秋冬とめぐる時の中で年中行事として行われることが多いのです。これらの行事は、農業をはじめとする土地ごとの生業と結びついた古い信仰のあり方を伝えています。

今回の展示では、正月行事から節分までの年中行事を紹介します。

正月準備と年神様

正月は入念な準備を経てやってきます。各地区の神社では、境内を掃き清め、鳥居や社殿に新たなしめ縄を張ります。

家々でも、正月の準備が進みます。川田谷の前領家地区では、宮司の高柳さんが集会所を訪れ、地区の人々から頼まれた御幣を手渡し、竈〆（かまじめ）を整えます。

竈〆（前領家区）

お正月に家々にやってくる神は、「年神様」とも呼ばれ、外から家にやってきて、年神様の棚に正月の間とどまるといわれています。

川田谷前領家の天沼家では、年神様の棚を作ることを今でも続けています。かつては、座敷の天井から、あきの方に向けて棚をさげ、一家の主人である年男が、三が日の間、雑煮をささげたそうです。

年神様の棚（平成8年）

年神様の棚（展示資料）

正月準備と年神様

かつての正月の行事は、農業とも深いかかわりをもっています。1月7日は仕事はじめ。この日、加納の増田さんは、畑に行って、三筋の畝を切り、種まきの所作をまねて、豊作を祈ります。

1月15日は、小正月。前日の１月14日に、増田さんはニワトコの木を削って、花のように飾ります。また、ニワトコの芽がついた茎を12本の竹にさした飾りを作り、これをたい肥場に立てて、豊作を祈るのだそうです。

小正月には、「団子さし」を行います。これも、作物が豊かに実った様をかたどっているのだそうです。

正月の仕事始め

小正月の団子さし

小正月の花かき

春を告げる　－本学院の節分行事と採燈護摩－

現在ではすっかり住宅地となっている坂田地区に、山伏の寺、本山修験宗本学院があります。江戸時代になると幕府は山伏に定住を促し、本学院齋藤家も坂田に新田を拓いて里の修験となり今日に至っています。

展示資料
本学院齋藤家の協力を得て、山伏問答の場面をとおして装束や法具を展示しました。

毎年２月３日の節分。本学院では節分行事として採燈護摩（さいとうごま）の供養が行われます。

錫杖を手にした山伏は、鈴懸（すずかけ）を身にまとい、結袈裟（ゆいげさ）を首にかけて、頭上には頭巾（ときん）をいただき、行事に臨みます。

山伏問答に始まり、続いて、結界の中で、弓、剣、斧の前段の作法を行います。護摩壇に松明の火が転じられ、導師は散杖を手に燃え上がる炎に向き合い、護摩木を投じて、人びとの平安を祈ります。

護摩の供養の後に、堂内で福豆まきが行われ、冬から春へと移り変わる節分に、山伏と人びとがふれあう行事は終わります。